

2022年度 学校自己評価システムシート（自由の森学園中学校）

目指す学校像	深い知識、豊かな表現、等身大の体験、自立した自由を育む、自由の森の「観（もののみかた）」の教育
--------	---

重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 総合的な学習（森の時間ESD総合）をさらに積極的に展開し、等身大の体験の場を大切にしていくことで、生徒一人一人の成長を教師・生徒が感じ取れるような学びの空間をつくりあげていく。 自由の森学園の教育実践の特徴である「環境教育」や「国際理解教育」などを多くの学校や団体と連携しつつ、充実させていく。 中学全校集会や縦割りでのテーマ別の話し合いなどを通して、話す・聞く・考えるを日常化していく。 開かれた学校づくりを目指すとともに、自由の森学園を地域に広報していく。
------	---

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成（8割以上）
	B	概ね達成（6割以上）
	C	変化の兆し（4割以上）
	D	不十分（4割未満）

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	保護者	3名
	卒業生	2名
	教職員	3名

学校自己評価							
年度目標				年度評価（4月3日現在）			
番号	評価項目	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	
1	<ul style="list-style-type: none"> 「森の時間」（ESD総合）を中心に、「米作り・郷土や文化を知る（野外フィールドワーク等を含む）」、あるいは「人の尊厳」等といったテーマに基づいて、主体的、積極的に、等身大で学んでいく場をつくっていく。 学習発表会などの機会において、一人一人の仕事をしっかりとさせつつ、学びを表現していく場の充実を図ると同時に、他学年との繋がりも大切にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学年における「森の時間」（ESD総合）において、大きな柱となるテーマは共有されている。その時間の中で、さらなる学びの充実と、多様な観点に基づいた展開とを実現させていくこと、あるいはその他の場面においてどのような時間をつくっていけるかが、課題であると考えている。また、生徒の継続的な物事への関心づくりができる仕組みや参画の構造をつくっていく必要性も感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> 特に「米作り・郷土や文化を知る」（中1・2）、「修学旅行」（中3）の時間における生徒の学びの成果をイメージしながら、中学部会や学年で検討していく。 「人の尊厳（性教育）」についての授業を「森の時間」で扱い、自分や多様な他者が尊重し合える空間づくりを実現させていく。 昨年度に引きつづき、「ESD総合」を考えるチームを発足させ、三年間の連続したカリキュラムとしての「森の時間」について、再検討を行っている。 班行動や協働体制の構築、練習登山、練習ハイク等の段階から教員が意識的に生徒に働きかけ、自然な流れの中で、各々の生徒が充実した体験をつくり上げていく。 米作りでは、田んぼ実行委員会を中心とした、中2がリーダーシップを取って実践できる場づくりを行っている。 学習発表会において、1・2年生が、次年度の学びを見通せるような場とし、3年生は3年間の学びのまとめになるような、場と空間を創っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 「森の時間」において「様々な体験や経験が生徒一人一人の学びや生きかたの力になっているか。」 公開教育研究会におけるテーマ別分科会への積極的な参加が出来たか。 田んぼ実行委員会を中心とした、中2がリーダーシップを取り、実践できたか。 中3「修学旅行」の旅のつくりについて、生徒と教員で主体的につくり上げることが出来たか。 生徒が協働し、個々の生徒にとって意味のある学習発表会の実現を目指すことが出来ていたか。学習発表会の場が、さらなる学びの充実につながっていく機会となっていたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 中1「地域を知る」の学びの中では、グループ活動などを通して、クラス、学年の交流が進んだ。「林業」では、十分に安全を確保しつつ、お互いに協力して行う一本の木の間伐作業を行う。自分一人だけでなくクラス、学年を意識した作業に注力し、そのことが普段の生活の中にも活かされるようになっていった。 「森の時間」を中心に、校外での実践を積み重ねてきている。1・2年の「郷土や文化を知る」、「米作り」などの体験の積み重ねが、一人ひとりの中で小さな自信と変わり、そのことが日常の学校生活の変容、進展につながっている。 中学2年生では、「郷土や文化を知る」の実践のまとめとして、名栗湖から飯能（学校）までの約20キロのデイウォークを計画していたが、積雪のため、あえなく中止となった。しかしながら事前、事後学習によって、かつて後師が歩いた道を辿り、昔の職業を想像し、学ぶことが出来た。 「田んぼ」の実践においては、2年生実行委員会を中心となり、一連の作業を2年生から1年生へと伝えることを通して、互いの距離を縮め、特別な活動を越え、学校生活全般にいい影響をあたえている。リモート授業期間には実現できない作業もあったが、1年生を巻き込みつつ、しっかりと多学年交流の場を築いた。 昨年度においては新型コロナウイルス蔓延状況にしたがって、中3「修学旅行」の日程や内容を調整する必要があったが、今年度においては、この機会に求める内容（ESD、平和学習、現地交流等）の多くが実現に至り、様々な対話、経験を、たくましく成長した生徒の姿が、卒業へとつながるその後の学校生活にはっきりと表れた。 学習発表会においては、展示を充実させ、各学年の表現、発表を見合うことが出来た。リーダーシップを発揮する中3生の姿が随所に確認された。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 「森の時間」における様々な体験を通じた学びの成果を大きな自信とし、教科での学びに加え、学校生活をより充実したものにしていく。 ある決められた時間や場だけでなく日常において、生徒が主体となり、学年の枠組みを越えて対話ができる場を実現させていく。 「森の時間」における「地域を知る」というテーマの中に、地域に貢献できる実践を取り込んでいく。 （ESD総合）を考えるチームにおける「森の時間」のカリキュラム化をさらに進めていく必要がある。ただし、カリキュラムに囚われすぎることなく、各学年の教員の特性に合わせ、新たな課題にもチャレンジできるような、多様な世界に繋がった創造的な時間にしていく必要がある。 学習発表会において模索した、新たな発表のスタイルを、更に発展させていく。
2	<ul style="list-style-type: none"> 自由の森学園の教育実践の特徴である「環境教育」や「国際理解教育」などを多くの学校や団体と連携し、より充実させていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 自由の森学園の開校以来、平和・人権・環境・自然との共生などの現代社会のテーマに、授業におけるさまざまな活動の中で取り組んできている。 こうした実践を校内に留めておくのではなく、同様の実践を行っている団体や、提携団体（東京大学、韓国サンマウル高校、ボルネオ 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの自由の森学園の実践を、ESD（持続可能な開発のための教育）の枠組みでまとめることにより、国内1000校、海外では1万校のユネスコスクールとの連携を目指す。 自由の森の実践を公開すると同時に、様々な団体と連携をしていく。 2021年1月より、学校寮の重油ボイラーを、地域の製材工場から出る 	<ul style="list-style-type: none"> 平和・人権・環境・自然との共生などの現代社会のテーマについて実践を進めてきたか。 そうした実践を学校内外に知らせることを意識的に行ってきたか。 環境問題への意識をより深めることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会科、理科、家庭科そしてESD総合の各科目において、ESDを意識した、持続可能社会をテーマとした授業の実践を積み重ねていくことができた。 校内では、理科室前の展示発表、又は学習発表会において報告を進めていった。 学校HPにおいて「ユネスコスクールだより」を設け実践を広く公開している。 「森の時間」「郷土や文化を知る」というテーマの一つに「林業」があり、林業 	A	<ul style="list-style-type: none"> 体験的な学びは、より主体的な学びに繋がりが、発表や報告の充実につながっていくことが期待される。 ユネスコスクール加盟から5年経ち、今後のいろいろな展開の準備を進めていく。 バイオマスまきボイラーの導入をきっかけに、生徒一人ひとりに、生活の中の環境問題の意識をより深めて

学校関係者評価	
実施日	令和5年7月24日
学校関係者からの意見・要望・評価等	
<ul style="list-style-type: none"> 昨年度より引きつづき、新型コロナ感染症対策に予断を許さない状況下、学びを止めないための工夫が感じられた。教職員の方々の日頃の努力を労いたい。 活動の積極的な展開は、中学校ならではの感じられる。一つ一つの取り組みが孤立したものとならず、連関し、学年が上がっていくとともに発展していくような仕掛けは、自由の森ならではのものであると感じる。 林業体験は、現代社会を生きる、実体験に乏しい中学生にとって、大変貴重である。第二次産業の実態、可能性について、身体を通して知っていくことは、広く日本の歴史や実状に視点を向けていく契機となるように感じられる。 天候に恵まれなかったとはいえ、中二で企画されていたデイウォークが実現できなかったことは、とても残念である。 米づくりに寄り添う一年間（二学年を通じて二年間）の体験は、我われの食文化を見つめ直すために、とても大切な取り組みとなるだろう。消費過多な現代社会において、食物、作物が長い期間、手間暇を惜しまずつくられていることに気づいていく取り組みは、欠くことが出来ない。今後においても継続した取り組みを希望する。 	
<ul style="list-style-type: none"> 天ぷら油を燃料とした車両の導入は、面白い取り組みである。家庭より使用済みの油を回収していく作業に対し、生徒も積極的であった。小さな取り組みの中から、大きな気づきが生まれていくことを期待する。 2021年1月より始まった「バイオマスまきボイラー」導入であるが、この先も持続可能な取り組みであるとするならば、是非応援していきたい。学校寮に在籍する生徒の反応はどのようなものとなっているのだろうか。気になる場所である。 	

		ラスト・ジャパンBCTJ、埼玉県博物館)等との連携により、実践をより深めたり広げたりしていく必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・廃木材を用いたバイオマスまきボイラーに切り替え、運用を始めている。 ・体育館入口にある自動販売機の利用による、「ボルネオの森の恩返しプロジェクト」に参加している。 		<ul style="list-style-type: none"> ・を多角的に学ぶ事でESDの視点で地域や産業、人々の生活の繋がりを知る事ができた。 ・バイオマスまきボイラーの見学を行い、自らが体験した林業(木材生産)の側面と、地域のエネルギーとしてのバイオマスという2つの側面から森林について考えることができた。 ・公開教育研究会において、ESDの分科会を立ち上げ、保護者等を交え、生徒たちによる話し合い、語り合いの場をつつた。 ・使用済み天ぷら油を燃料とした公用車の購入に伴い、生徒の中で、油回収プロジェクトが行われた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・いく。 ・今年度も、校外において自由の森の活動を広く伝える場である、「アースデイ東京」に生徒と共に参加する予定だったが、行えなかった。「アースデイ東京」などといったイベントに今後も引き続き参加し、様々な団体と交流していく。また、本校独自に行う「アースデイ」に準じた発信の機会の実現について模索している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ボルネオの森の恩返しプロジェクト」や、「ユネスコスクールだより」等の取り組みに触れることが少ない。学園全体の取り組みとなっているのだろうか。
3	話し合いの場を習慣化し、学校生活の中での疑問、問題点などを出し合い、話し合うことにより、より充実した学校生活にしていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・日常のなかでは、大きな行事に追われ、ホームルーム活動の中で「話し合う」という習慣がなかなか創られていない状況にあるため、そのことを習慣化していくことを目指す。また、中学全校集会などを意識的に催し、自治的に物事や行事、学校を動かしていくなど、クラス、学年、全校と言った縦横の関係をより構築していく必要性も感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学部会において時間の設定をしっかりと行う。そのことにより、生徒も見通しを立てて準備することができる。 ・少人数による「哲学対話」の実践を進めていく。 ・今年度はコロナ禍にあり、校内研究会のような集まりは実施できなかったが、「哲学対話」を取り入れ、話し合いのルールを明確にし、誰もがのびのびと話しやすい空間を創っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの場の実現に向けて、しっかりと準備が出来たか。 ・全校ミーティングで学年の枠を超えて、発言する・聞くということが出来たか。 ・公開教育研究会につなげることができたか。 ・哲学対話等の実践により、話し合いやすい空間を創ることができたのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度より引きつづき、コロナ禍において、校内研究会や中学全校ミーティングのような大きな集会を実施することは難しく、クラス、学年単位での話し合いの習慣化に留まった。しかしながら、中3生の卒業を前に、生徒の方より学年を越えた話し合いをしたいという希望が出され、交流の機会が設けられることもあった。(「哲学対話」については、クラスレベルでは文化として定着しつつある。) 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究会を中心とした話し合いの場や空間をどのように、普段のHRでの話し合いにつなげていくことが出来るか。 ・普段のHRでも話し合いを、習慣化していく。 ・生徒自治を視野にいれた、縦横の関係をより構築していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集会などが制限されていた時期であるから、話し合いの機会が十分につくれなかったのも仕方のないこと。様々な取り組みの過程に仕方の無いことかと思う。そういった状況下において、やはり大切にすべきなのはクラスHRにおける話し合いの場なのではないか。 ・生徒間対話を充実させていくことは、ただでさえ難しいことであるのに、コロナ禍と言われる状況下、より困難さが増してしまっている。何をどのように行うかといった計画以上に、場の力によって、生徒一人ひとりの中でつくられていく化学変化、偶発的な変化が何より大切。対話の場づくりを積み重ねていくことは今後も大切に考えていって欲しい。
4	開かれた学校づくりを目指すとともに、自由の森学園の教育を積極的に発信していく。	<ul style="list-style-type: none"> ・外部の研究者や教育関係者等との交流を経、学びのあり方を見つめ直す。 ・地域との交流・連携を強化し取り組んでいるため、自由の森学園に対する地域の理解も深まってきているが、より一層自由の森学園への理解と共感を広げ、生徒募集につなげていく必要がある。 ・自然豊かな飯能という地のなかで地域との連携をより進めていくことにより、生徒の学習活動を充実させていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公開研究会を従来のかたち(対面式/各教科における日常の授業を公開し、併せテーマ別分科会、教科別分科会を実施)で行うことで、日常の延長線上にある、新たな学びの機会を得る。 ・小学生高学年を対象とする「わくわくワーク」などの学びと体験を軸にした一日体験的なイベントを開催していく。 ・地域清掃活動への参加。 ・地域の災害時避難所として指定している為、災害時の対応をより具体的にしていく。 ・地域の喫煙防止キャンペーンに参加。 ・地域の方への学園イベント情報や地域内での活動をお伝えする「小岩井自由の森通信」などの配布。 ・中2の「田んぼ」の実践を小岩井地域内で行うことで、地域の方との関わりが増えてきている。 ・学校案内パンフレットや、学園HPやブログ等で、学園の実践を公開している。また、中学のみのパンフレットも作成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本学園における学びを多角的に捉え直し、自身に引きつけて考えることができたか。 ・生徒、教師の地域への積極的な参加の意識が高まったか。 ・どれだけ自由の森学園の実践を発信できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数年ぶりに従来のかたちでの開催となった公開研究会が、大盛況となった。生徒たちの参加にも積極的であり、難しい内容を含む教科別分科会にもひるまず、向き合っていく姿が多く見られた。 ・「飯能祭」、「ソーデーマーチ」などにおいて、以前と同様に教員、多くの生徒が関わっている。 ・地域の中学校での出張授業が増加している。 ・一年を通じ、「わくわくワーク」を実施することができた。毎回定員いっぱいになり、生徒募集に繋がったが、参加希望者が多くなり、定員で打ち切る状況でもあった。 ・学園HPやブログ等へのアクセス数が増加している。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・公開研究会と併せ、かつて実施されていた校内研究会の実現を模索していく。 ・「わくわくワーク」の参加定員を拡大していく予定である。 ・「森の時間」(ESD総合)を中心に、さらに地域に視点を置き、学んでいく時間を増やしていくのと同時に、地域の方を講師に招いたりして、学びを深めていく。 ・小岩井地域で行う実践をつくっていくことにより、地域の方との関わりが増えてきている。そういった取り組みは今後も継続し、『小岩井の自由の森学園』という認知を広めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公開研究会では、生徒自身にも積極的に学ぼうという姿勢があり、大きな実りがあった。コロナ禍以前のかたちにはなっていたものの、1日開催となっていたのが残念。内容を見直すなどして2日間開催に戻して欲しいという願いがある。 ・「わくわくワーク」は近年、大盛況であると聞く。実際に学校を見、その上で感想を持ってもらうということが大事である。学校を知ってもらうための大変良い取り組みである。多くの受験生がそういった機会を経て、入学することが、自由の森という学びの場の更なる進化の礎となっていくように思われる。